S.　Ashina

＜オリエンテーション＞

Ａ．テーマ：キリスト教思想研究入門――聖書と哲学

Ｂ．目的

この特殊講義は、すでに系共通科目「キリスト教学講義」を受講し、キリスト教思想研究に関心のある学部生、あるいはキリスト教研究の基礎の習得をめざす大学院生を対象に行われる。キリスト教思想研究を目指す際に身につけておくべき事柄について、またいかなるテーマをどのように取り上げるのかについて、解説を行う。

Ｃ．内容

本年度前期のテーマは、「聖書と哲学」であり、創造、契約、堕罪、知恵、神の国、終末などの諸問題、またアウグスティヌス、パスカル、カント、キルケゴール、ブーバー、リクールなどの哲学者が取りあげられる。

Ｄ．確認事項

受講者には、一回の研究発表が求められる（キリスト教学学部生には原則的に発表が求められる。ほかの者はレポートに代えることも可能）。成績評価は、この研究発表によって総合的に行う。

受講生には、常識や先入観を批判的に問い直す態度と積極的な授業参加（参考文献による復習を含め）を期待したい。質問は、オフィスアワー（木２、金３）を利用するか、メール（Sadamichi.Ashina@gmail.com）で行うこと。

Ｅ．授業スケジュール

＜聖書と哲学＞

オリエンテーション――ヘレニズムとヘブライズム　4/9
１．存在論と聖書　4/16
２．創造――フィロン、アウグスティヌス　4/23
３．契約――社会契約説 4/30
４．知恵――カント　5/7
５．堕罪・悪――リクール　5/14
６．歴史――ヘーゲル　5/21
７．神の国と終末――アウグスティヌス、ヨアキム　5/28
８．愛――パスカル　6/4
９．自己――キルケゴール　6/11
１０．死――ハイデッガー　6/25
１１．永遠――波多野精一　7/2
１２．受講者の研究発表　7/9
１３．受講者の研究発表　7/16
１４．受講者の研究発表　7/23

＜ヘレニズムとヘブライズム＞

一　キリスト教と神観念の複合性

絶対的なものとしての神

キリスト教思想において、「絶対的なもの」として位置づけられるのは何かと問われるならば、それは第一義的に「神」であると答えることができるであろう。したがって、キリスト教思想における「絶対的なもの」というテーマで論じられねばならないのは、キリスト教的な神思想の根源、またその基本構造であると言わねばならない。本章では、キリスト教とその神思想を、ヘレニズムとヘブライズムの二重性において捉えた上で、その神の絶対性の思想の特徴を明らかにすることを試みてみたい。形而上学批判を基調としたポストモダンの思想状況において、キリスト教思想は聖書の神思想への立ち返りという経路を辿りつつも、新しい神思想の形成を模索している。ここに 21 世紀のキリスト教思想の可能性を見ることができる。

ヘブライズムとヘレニズム

キリスト教的神思想は、キリスト教的伝統を構成する複合性に即して理解する必要がある。この点で、まず参照できるのは、19 世紀以来、マシュー・アーノルドの主張を通して普及した、「ヘブライズム」(Hebraism)と「ヘレニズム」(Hellenism)の類型論であって、[1] 19 世紀以降の近現代キリスト教思想が、この類型論によって示されたような伝統の複合性あるいは緊張関係を自覚的に捉えていることは――近代における、ギリシャ的近代的伝統との差異化におけるユダヤ的キリスト教的伝統の再発見――、たとえば、「ルネサンスと宗教改革」におけるトレルチの言葉からも確認することができる。

「それはわれわれのヨーロッパ世界が二重の源泉から成立していることにもとづく対立、つまり予言者的・キリスト教的な宗教世界からと古代の精神文化からとに由来する根源的対立なのである」、「この二つの契機はそれがたがいに緊張関係に立っていることによって」、「将来においてもわれわれの運命になるであろう。」[2]

キリスト教神学の形成過程

以上のように、キリスト教思想はヘレニズムとヘブライズムとの緊張関係において成立したものと理解できるが、これは古代地中海世界におけるキリスト教の形成・展開という歴史的事情によって規定されている。このことは、ハルナックがキリスト教のギリシャ化と述べた事態であるが、しかし同時に、それはギリシャ・ローマ文化世界のキリスト教化でもあった――ダルフェルスが述べるように、[3] キリスト教神学は先行するギリシャの哲学的神学を学的基礎としつつ、キリスト論によって哲学的神学を変革したのである――。したがって、キリスト教思想における絶対的なものの問いは、古代ギリシャの形而上学と聖書的思惟という二つの伝統の動的な緊張関係に即して、論じられねばならない。これが、本章の課題にほかならない。

二　聖書の神と形而上学的神との緊張関係

ハヤ･オントロギア

有賀鐵太郎は、ヘレニズムとヘブライズムのそれぞれの思考の核心を、オントロギアとハヤトロギアとして分析した上で、キリスト教を両者の動的関係体としてのハヤ･オントロギアと説明している。

「ハヤトロギアとオントロギアとの間における緊張関係が問題とならざるをえない。私の言いたいことは、その何れか一方を切りすてることではなく、また両者の早急な綜合を求めることでもなく、むしろ両者の相異を認めながら、その関係を緊張関係、すなわちト

ノーシスとして捕えるべきだということである。」[4]

＜注＞

(1) 水垣渉「ヘブライズム・ヘレニズム・キリスト教」武藤一雄・平石善司編『キリスト教を学ぶ人のために』世界思想社、一九八五年、二四―三四頁。なお、本章で導入される比較級の神という考えは、水垣の論考に示唆を受けたものである。

(2) トレルチ「ルネサンスと宗教改革」(1913)、『ルネサンスと宗教改革』内田芳明訳、岩波文庫、74頁。（Ernst Troeltsch, Gesammelte Schriften 4. Aufsätze zur Geistesgeschichte und Religionssoziologie, Scientia Verlag, 1981(hrsg.v. Hans Baron, 1925)）

(3) Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell, 1988.

(4) 有賀鐵太郎「神学的原理としてのトノーシス」（一九七三）『信仰・歴史・実践』（『有賀鐵太郎著作集　五』）創文社、一九八一年、一八二頁。この点については、芦名定道『自然神学再考』（晃洋書房、二〇〇七年、三一―三四頁）も参照。

＜補足＞

（１）古代地中海世界と知恵思想

・ペルシアからイスラエルあるいはギリシアへ

・波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』（『波多野精一全集　第三巻』）

序

希臘の巻

第一章　ホメロス

第二章　ヘシオドス

第三章　抒情詩人

第四章　オルフィク教徒

第五章　ミレトス学徒

第六章　クセノファネス

第七章　ピュタゴラス及びピュタゴラスの徒

第八章　ヘラクレイトス

第九章　パルメニデスよりアナクサゴラスまで

第十章　アテナイの文化

第十一章　悲劇詩人

第十二章　ソフィスト

「第十章　アテナイの文化」

古代ギリシアの宗教思想は、神話時代からミレトスの自然哲学へ、そしていよいよアテナイへ展開する。おそらく波多野は、これまで論じてきた諸思想の中で準備された宗教思想が開花するアテナイの哲学思想へと考察を進め、プラトン、アリストテレスを中心に本格的な議論を展開する構想を練っていたものと思われる（その内容については、著作の形で残されておらず、われわれは残念ながらそれを知ることはできない）。これが、「アテナイの文化」について、短いながらも、一つの章をさいた理由であろう。

議論の中心は、アテナイ文化における新しい哲学の展開、その歴史的背景、そして詩人から哲学への移行である。

１．新しい哲学の展開

先行する時代の哲学が「人生問題に対して比較的冷淡無関心であった」(113)のに対して、アテナイは、まず政治次いで一般文化においてギリシアの中心となり、哲学の文化的政治的位置における一大変革が行われた。波多野は次の２点を指摘する。

・「人生問題」が哲学的考察の対象となった。人事に関する論究が、自然哲学の問題と同等の地位を獲得する。

・精神的文化的生活一般における哲学のしめる位置が動いた。(114)

「今や哲学者たちは、人生の意義と目的を解明し、理想を建設し、価値を創造するを、わが任務として自覚するに至り」、「国民の精神的教導者であるという特権は詩人たちよりして彼らの手に移った」(114)＝「哲学のこの新意義」、「純然たるアテナイの特産物」「哲学を天より地に」もらたしたのは「ソクラテス」(114)

(波多野は、この点では、プラトンやアリストテレス以上にソクラテスの意義を強調する。)

２．歴史的背景

・ペルシア戦争で全ヘラスの自由を救ったアテナイ→ギリシアの中心としてのアテナイ

↓

「歴史に類い希なる、多面的なる、豊富なる、充実したる、その文化を産出した」、「一市民の教養さえ今日においてもとうてい望みがたきほどの高さ」

「ペリクレス」がアテナイを「ヘラスの教育場と呼んだこと」

・「この文化を支え活かし統一したものは国家の観念」

個人の自由なる多方面の活動は「大体において国家においてのもの」「国家のためのもの」

「公的生活を離れた私的生活の価値は原則として認められなかった」(115)

(公共性＝政治、私的経済からの区別という図式は、その後の世代、たとえばアーレントが強調するポイント。波多野はそれを支えた奴隷制についてどのように考えたのであろうか。)

パンテノンを飾った芸術作品も三大詩人の傑作も「国家的産物」

・「父祖伝来の宗教」(116)の尊重。当時のアテナイの不朽の芸術的作品は「神への献げ物」(115)

教養的な市民は同時に「敬神の念厚き市民」(116)

３．詩人から哲学へ

・個人の自覚と反省が一層強く鮮やかになる。

↓

・この尊敬に堪えない文化状態の破綻、伝承的宗教の地盤に築かれた凡ての文化とその地盤の動揺。

「宗教問題の議論はついに父祖伝来の宗教の無能力の証明となり、延いて国民の精神的指導者の失脚となり、かくて詩人の時代は去って哲学者の時代は来たった。」(116)

(この命題は波多野の中心的主張であるが、では詩人の営みとしての文学はいかなる文化的位置へと移行することになったのか。知者としての哲学者の登場は、ペルシア帝国に関わった広範な地域に見られる動向と言えないか。ヘブライとの平行関係は？)

（２）近代啓蒙思想の意義

歴史主義の誕生　→ 伝統の歴史的反省　→　伝統の多重性の発見

ヘレニズムとヘブライズムという

問題設定の誕生